

酒票（日本酒ラベル）の起源

The Origin of SAKE Labels

石田 信夫
ISHIDA Nobuo

Until now, there have been few study examples on the origin of sake labels.

From a survey conducted by Yokkaichi City, Mie Prefecture, it is presumed that its origin was a woodblock printed matter affixed to sake barrels sent from Mie Prefecture to Tokyo.

はじめに

これまで日本酒ラベルの起源の研究例は、ほとんどなかった。しかし三重県四日市での調査などから、起源は「三重県から東京に送られた酒樽に貼られた木版の刷りもの」と推定する。

私は日本酒ラベルの収集家である。はじめは一升瓶のラベルをはがしていたが、収集家との交流の中で次第に古いものを手に入れるようになった。その中でも目を引かれたのが、浮世絵のように美しい木版多色の大判の刷り物である。明治の初期に樽に貼ったものと思われた。

しかし調べても、ラベルについての資料や文献はほとんどない。先の刷り物についても収集家の手から手へとわたったものが多く、出所由来は分からなかった。

2021年秋、筆の里工房（広島県熊野町）での日本酒ラベル展「酒票の美—文字と意匠」に所蔵品を出展することが決まり、図録の解説をまとめる必要に迫られた。まだわからないことが多いが、とりあえず今の段階でのまとめをすることにした。

現段階の現物資料を基にしての仮説なので、これから新資料が出てくると覆る可能性もある。「伊勢発祥説」を補強してくれるような、あるいは反証となるような資料の出現を待ちつつの中間報告である。

第1章 ラベル以前の酒銘表示

現在の酒は主として一升瓶で流通しているが、ラベルを貼った瓶の登場は明治後期になってから。それまでは樽の時代だった。樽には酒銘をどう表示したか—からたどってみたい。

江戸時代の浮世絵などの画像資料から見ると、次の2種類だった。

- ① 裸の樽に直接表示する
- ② 樽にかぶせた菰（「菰被り」という）に表示する

いずれも型刷り（文字部分を切り抜いた型を置き、上から墨を刷り込む。後には焼き印も現れる）だった。

浮世絵などに頻繁に出てくるのは、②の菰被りタイプである。例えば落合芳幾『新酒番船入津繁荣図』や斎藤月岑『江戸名所図会』などを見ても。灘で船積みされた酒樽が、江戸・新川の間屋街に着いて荷揚げされ、橋の上を荷車で運ばれ、店先に積み上げられる風景が活写される。そこには「正

宗」「いろは」「歓楽」などの酒銘が大書されている。

酒問屋がスポンサーと思われる幕末の刷り物、梅素亭玄魚『新撰銘酒寿語録』には、80銘柄の菰被りがひしめき、墨一色ではなく、朱色の文字や絵柄（鯛など）も現れる。見るからに威勢がいい。

江戸の画像に菰被りが多いのは、灘から送られてくる酒樽がすべてそうだったからだろう。樽廻船は、波荒い潮岬をかすめ、熊野灘に出る。酒樽をそのまま積み込んだのではぶつかり合って損傷の恐れがある。それを防ぐため、クッション代わりに菰を巻いたのである。

しかし遠方への船積みでなく近在で売る分には、そこまでのことをしなくていい、裸の樽にそのまま型刷りをしたと思われる。それが①のタイプだ。

双方を同時に描いたのが、歌川国芳の『誠忠義臣名々鏡 唐橋全助』=写真1=である。赤穂義士の手前にどんと置かれた「男山」と「剣菱」は菰被り。いずれも灘から到来した酒だ。後方に控える「大當」は裸樽。おそらく近場、関東の地回り酒と思われる（先の『新撰銘酒寿語録』には記載がなく、人気銘柄ではなかったのかもしれない）。

食文化史研究家の飯野亮一氏によると、江戸時代の草双紙、読本、浮世絵などの刊行物をチェックした限りでは、酒樽の酒銘はすべてこうした菰・樽への型刷りで、紙のラベルは確認例がないという。

*いわゆる酒票の呼称について、本稿では原則的に、洋紙に印刷して瓶に貼ったものを「ラベル」、和紙に手刷りして樽に貼ったものを「樽貼り」と呼び分ける。ただラベルは広い意味でも使い、「木版ラベル」という言い方もしている。また過渡的に樽にも印刷ラベルが貼られた時代があるため、必ずしも厳密な使い分けはできていない。

第2章 明治に現れた樽貼り

今の紙ラベルの直接の起源にあたるのは、明治になって登場した樽貼りと思われる。樽貼りについては、文献や参考資料がないため、手持ちの現物資料197点を基に考えていく。

ここであらためて、樽貼りとはどんなものかを押さえておきたい。というのもよく似たものに、同じ木版多色刷りで一回り大きい「引き札」があり、混同されることもあるからだ。

「引き札」は今でいうチラシである。卸、あるいは小売りが、顧客獲得のために、自店の扱い商品を刷り込んであちこちにばらまいた。といっても単に商品を記しただけでは喜ばれない。そこでもらった側も楽しめる、あわよくば壁にでも貼ってもらえるようなものを作ろうとした。恵比寿大黒や七福神、鶴亀という縁起の絵柄や美人図をあしらったのである。

引き札の構成要素は、めでたい絵柄、扱い品目（木材商、太物商など「〇〇商」の表記も多い）、店の名前と住所、電話番号一となる。扱い商品と絵柄はほとんど無関係だ

これに対して樽貼りは、酒銘を真ん中に大きく表記し、醸造場名とおおざっぱな住所を加える。「銘酒」「美酒」「〇〇醸」「〇〇謹醸」などの印があちこちに押しであり、「名声布四海（めいせい しかいにしく）」などの雅詞がちりばめられる。バックの絵柄は、酒銘にちなんでいなければならない。

酒を扱う店が引き札を出すケースもあるので、混同しやすいこともあるが、先にあげた特徴に照らせば、両者は簡単に見分けがつく。

ついでながら引き札は、宣伝用なので大量に刷られて、今でも各地に残っている。そう珍しくはない。しかし樽貼りは刷る枚数が少ない。しかも樽は、酒に2回程度使われると、醤油などの容器に転用される。その都度、紙ははがされ、捨てられる。水につけてはがそうとしても、色がにじんで台無しになる。それやこれやで、まず残らない。

各地の資料館、博物館でも現物を見かけないのはそのためだ。今残っているのは、蔵や印刷所から

出たものが好事家の手から手に渡り、捨てられる難を危うく逃れたものばかりといえる。

さて初期の樽貼りは、酒銘と醸造場を刷っただけの墨一色の素朴なものだった。筆文字をそのまま彫って、版に仕上げたように見える（決?ひ玉=写真2）。しかし次第にデザインが意識されるようになる。

周りに縁取りがされ、印が押される（高砂=写真3）。絵柄が現れて色数も増えていく。こうしてみるうちに「進化」が進む。絵柄も、咲き競う桜や菊、牡丹から、常盤の松に竹や梅。はねる鯛や滝登りの鯉に、鶴や亀…とおめでたいテーマが定番化していく（菊水=写真4）。刷りも素晴らしい。花びら一枚一枚を刷り分けたり、グラデーションをかけたり。まさに浮世絵のように絢爛たる世界が広がっていった。

発祥の時期は、なかなか確定しにくい。しかし版を開いた年月が記載されたものが数枚あり、その一つ「敷島」=写真5=には「明治七改板」「明治十五改板」の2種類がある。

巻物になぞらえて、上部には桜花をあしらう。センスを感じさせる意匠だ。これはすでに「絢爛期」のもので、少なくとも8年以上はこうした樽貼りの花盛りが続いたことを裏付ける。とすると、それに先立つ数年が、素朴なデザインの「揺籃期」だったのではなかろうか。もっと踏み込むと、発祥は1872（明治5）年ごろと推定されるが、それは後述する。

発祥の時期とともに場所も確定したい。

普通に考えると、酒造技術をリードし江戸に大量の酒を送り込んだ灘かと思われよう。しかし樽貼りに関しては、灘ではなく、伊勢（三重県）と推定する。その理由は以下である。

- ① 所蔵品の中で「伊勢」「北勢」などと表示した樽貼りが極端に多い
- ② 四日市市の蔵で、木版多色刷りの樽貼りと版木を確認した
- ③ 伊勢からの積み荷は、菰被りでなく裸樽（紙を貼りやすい）であった可能性が高い
- ④ 灘からの輸送は菰被りに酒銘を明示しているので、ラベル様のものは必要なかった項目ごとに詳しくみていく。

* 廃藩置県で「伊勢国」は三重県となった。しかし明治初期の樽貼りは「伊勢」「南勢」「北勢」などの表記が一般的なので、文中では、時系列的には「三重県」と書くべきところ、あえて「伊勢」と書いたケースも多い。「伊勢」というと現在の伊勢市、つまり南部の狭い地域をイメージしがちだが、本稿では全县を指す。

1 伊勢銘柄が7割以上

197点の樽貼りの蔵の所在地の内訳は右表のようになる（現在の市町名）。これは四斗樽用で、ほかに小分け用の二斗樽に貼ったと思われる小型票もあるが、ここでは除外する。

圧倒的に多いのは三重県で、90点ある。蔵の所在地が明らかになっている129点の中で7割を占める。不明も含めた全体の中でも46%。ほかの県と比べて際立っている。

この40年余り、各地の方々と交換したり、買い取ったり、譲り受けたりしたが、入手先の地域に特に偏りはない。ヤフーオークションが一般化したここ数十年は、常時、出品物をチェックして、1枚から数枚ずつ買い集めていったが、こちらも出品者は全国各地の人だった。

それでも収集品が結果的に伊勢に大きく偏ったということは、この地方の蔵が多量、多種類の樽貼りをを用いていたことを示している。

膨大な食品ラベルを集めている大阪市のケンシヨク「食」資料館も、約60点の木版樽貼りを所蔵しているが、収集を任された吉積二三男氏によると、

樽貼りの内訳	
三重県	=90 (点)
〈北勢〉	
川越町	…2
四日市市	…30
鈴鹿市	…30
亀山市	…3
〈中南勢〉	
津市	…10
松坂市・多気郡	…7
不明	…8
愛知県	=9
関東	=25
埼玉県	…11
栃木県	…6
茨城県	…5
群馬県	…2
神奈川県	…1
兵庫県	=2
その他	=3
不明	=68

計197

やはり同じような分布傾向だったという。

これだけの数や種類の多さは、発祥との関連を思わせる。

2 四日市で確認した版木

ただ多量、多種類の伊勢の樽貼りが残っていたとしても、問題はそれが現地で制作されたかどうかである。

例えば伊勢から送った酒樽に、東京の間屋が木版多色の刷り物を貼って売った可能性も考えられよう。江戸の浮世絵以来の刷り物の技が蓄積していたからだ。とすると、発祥地は東京となる。

困ったことに、手元の樽貼りは出所が全く分からない。何人かの手を経由したり、オークションで入手したりしているので、追跡のしようがないからだ。そこで行き詰まっていた。

しかし考えていても仕方がない。瀬踏みを兼ねて、旅行のついでに県北部の数軒の蔵元を訪ねたのが数年前だ。さらにコロナ禍に見舞われる直前の2020年3月、本格的な調査のために再訪した。

県内各地の資料館、図書館には資料がなく、蔵元にも記憶はほとんど残っていないのは驚きだったが、四日市市室山、神楽酒造で大収穫があった。「旗頭」「揚巻」（墨版）や「神楽」（多色刷り）など5種類の樽貼りと10点以上の版木=写真6=、さらに印刷時に紙をそろえる道具を確認したのである。

伊藤隆造会長によると、蔵を整理したら出てきたとのことで、言い伝えはない。しかし一部の版木の裏に「壬文久二年」「時維明治□□□戌寅」（明治の戌寅は11年）との墨書があった。幕末から明治初期にかけて現地で刷られたという紛れもない証拠である。

3 「裸伊勢」という言葉

「伊勢発祥説」の状況証拠は次第に固まってきた。ではなぜ伊勢か、なぜ紙ラベルだったか、について考えなければならない。①地理的条件②残された「裸伊勢」という言葉—の2つを手掛かりに探っていきたい。

まず地理的条件である。

江戸市場は灘酒が圧倒的な優位を保っていた。しかし18世紀後半には、「中国酒」と呼ばれる知多半島の酒が急激に存在感を増してくる（当時の「中国」は上方と江戸の中間という意味。現在の中国地方とは違う）。

江戸までの海上距離は、灘のほぼ半分。潮岬や熊野灘のような難所もない。地の利による低リスク、低コストは、参入の助けになっただろう。「ねのひ」銘柄で、後にソニーの創業者を出す常滑の盛田家は、知多酒を代表した。

その対岸が伊勢である。目と鼻の先の活況は、大きな刺激になったはずだ。先の神楽酒造は、すでに幕末には江戸に出していたと思われる。残っていた「旗頭」の樽貼りが、前出『新撰銘酒寿語録』のロゴと酷似していることが、今回分かったからである。

「旗頭」などを先発として、その後に多くの蔵が続いた。契機は1871（明治4）年だったと思われる。明治政府は、新規免許料と醸造税を払えばだれでも酒造が可能、と規則を改めた。新興の蔵が各地に立ち上がり、全国で3万軒に及んだとされる。伊勢でも同じだっただろう。

もともと伊勢は、江戸との人的つながりが深かった。天下の呉服商となった三井や、酒問屋「国分」の創業者は松坂の出身。商業で深くつながる人脈があるだけに、酒の東京送りには有利だったとみられる。

次いで、残された言葉「裸伊勢」である。ここから「なぜ紙を貼ったのか」を考えをめぐらせたい。

近世海運史や灘酒造史研究の大家、故柚木学氏から聞いた言葉だ。ラベルの発祥を尋ねて、それについては不案内だったが、そう言えば…というような文脈での話だったと記憶している。

酒樽は普通菰被りで船積みするはずなのに、伊勢では裸樽で積むのか。そんな驚きの気持ちから生まれた言葉と思われる。ではなぜ、普通でないことをしたのか。

伊勢酒にはブランド力がなかった。東京市場に送るといっても、灘や知多を押しつけるまでの力はない。ならば妙手はないか…。その中で出た一つの知恵が菰を巻かない裸の樽へのラベル直貼りだった、と考える。「菰被りに墨の型刷り」の先行蔵に比べて、「樽に鮮やかな木版多色刷り」は、人目も引くし、菰を巻く手間も省ける。

学者がどこかで聞いて記憶の隅に残っていた一語によって、木版ラベルを貼った裸樽が伊勢の港（四日市）を出ていく姿がイメージできる。

もちろん疑問も出てくるだろう。菰というクッションなしの裸樽で本当に大丈夫だったのか、紙が破れたり汚れたりしなかったか、と。

ところが現実には、幅広の竹のタガそのものの弾力が結構なクッションになっていた。出荷の際は、薄い簡易な菰を掛けて汚れを防いだという。いずれも戦前の樽作業を知る当地の関係者の話（ラベルに関しては判然とししないが）である。

四日市から東京へは、潮岬ほどの難所はない。そこまでの風浪の心配がなければ「重装備」はしなくてもいい。試してみてこれなら軽装で十分、との判断があったのだろう。

以上のことは、当時の東京で伊勢の裸樽を描いた絵や版画、あるいは写真があれば、文句なしに証明できる。しかし未確認なので、推論の域にとどまらざるを得ない。ただ時代が下って1919（大正8）年1月1日付の勢州毎日新聞の『新年参宮雙六』に、当時の荷姿を思わせる画像がある。

青竹のタガをきりりと締めた樽の胴に「雙鶴」のラベル＝写真7。時代的には木版ではなく近代印刷と思われるが、間接的な証明にならないだろうか。

4 東京へ海上の道

あらためて輸送インフラに触れておく。

これまで伊勢（四日市）から江戸（東京）に航路があることを前提にした書き方をしてきた。それは樽貼りから読み取れるからだ。

例えば「別品」は、醸造地が「北勢楠郷」（四日市）で販売は「鹿島一手捌」とある。鹿島は、東京・新川の酒問屋だ。また「北勢川島」（同）の「しら菊」には「東京一手捌」とある。

伊勢の酒が東京の酒問屋でさばかれていたということだ。当時の輸送は船。灘をはじめ各地から船積みされた酒樽は、いったん問屋が荷受けをしたうえで卸していく。そのルートに伊勢酒はしっかり乗っていた。

『四日市港開港百年史』によると、1870（明治3）年には、東京との定期航路が開かれている。港の移出品目の一つに酒があり、1872（明治5）年1-11月に5675樽、明治15（1882）年には12万9832樽という大きな数字が記録されている。

郷土史に詳しい田中明郎氏によると、四日市港からはアメリカ向け輸出品でもある「伊勢茶」や菜種油が、横浜に向けて送られていた。酒樽も混載され、「別品」や「しら菊」も入っていただろう。

これに先立つ幕末にも、四日市から江戸へ酒が送られていたことは、先の「旗頭」の例がある。こちらはまだ直送航路が開かれていない時代だったので、地元の商人の仲介で集荷に来た知多半島の廻船に積んでいたようだ。

大消費地に向かう海上の道があったことが、樽貼り誕生の大前提だったといえる。

第3章 樽貼りの広がり

それまで菰被りが当たり前だった東京・新川の酒問屋にとっては、三重からの裸樽は新鮮だっただろう。しかも樽貼りは、当初こそ地味だったが次第に色数を増やし、浮世絵のように華やかになっていく。お客にアピールするにはもってこいだ。

酒問屋以上に刺激を受けたのが、実際に伊勢の裸樽を見る機会があった関東の地回り酒の蔵ではなかったか。自分たちも、近場の東京へおそらく裸樽で陸送していた。酒銘は墨だけの型刷りだったと思われる。

それならうちも、いやうちももっといい樽貼りをつくってやろう、という気になるのが自然だ。東京には浮世絵の技を引き継ぐ印刷所が健在で、明治初期はパッケージやラベルなど美しい商業印刷物の担い手になっていた。

現に、関東の蔵の樽貼りが多く残っている。中に印刷所が記されているものがわずかにあり、その一つが「東京金花堂印刷」である。「雲龍」(埼玉県行田) = 写真8 = や「大吉慶」(茨城県結城市) = 写真9 = の樽貼りを何種類も作成している。色の鮮やかさ、微妙なグラデーションの表現は、高い技術レベルを感じさせる。

明治中期になると「文明開化」の波が印刷業界にも及んでくる。

木版の樽貼りは美しかったが、大量に刷るには手間がかかった。色数だけの版木をつくり、同じ回数重ね刷りをする。熟練も必要だった。対して近代印刷(石版→銅版)は、版下にする原画さえつくれば、あとは機械に任せられる。ベテランの職人は必要なかった。次第に木版にとってかわられたのは仕方なかったただろう。

同じ絵柄で、木版と近代印刷との両方で刷られた樽貼り「初日影」が手元にある。比べると、和紙を使った木版は色合いがしっとりして、ぼかしが実に自然だ。近代印刷の方は、ぼかしが不連続で、洋紙の紙質からかべらった印象がある。多くの人に聞いてみたが、圧倒的に木版が支持を集めた。

近代印刷は、美しさを犠牲にして、作業効率やコストの低下という経済的な利をもたらしたが、それ以上に大きかったのは、地方の蔵に酒票の美を広げたことである。

木版の樽貼りは、伊勢から発し、対岸の知多半島や関東に及んだが、逆に言うとそれ以上は広がらなかった(現段階の収集によれば)。やはり職人技の一定の集積がないところでは難しかったように思われる。

しかし近代印刷になると、収集した樽貼りの地域分布は一気に広がり、西は九州、中国地方、東は東北地方に至る。絵柄も、細かい連続模様や極細の線を多用することができ、表現の範囲が広がった。明治中期から昭和初期にかけての樽貼りデザインの多様化につながっていった。

第4章 灘の事情

最後に、灘の事情に触れておきたい。灘はラベルの発祥地とは考えにくい理由を挙げて、「伊勢発祥説」の裏打ちとしたい。

海の難所を超える灘酒は、菰被りをやめて裸樽にすることができなかった。理由はその一点に尽きる。酒銘をしっかりと刷り込んだ菰被りには、ラベルを貼る必要がない。型刷りの代わりに紙を貼ろうとしても、菰の上にはうまく固定できないし、こすれたら破れる(裸樽では、上下の竹のタガの谷間に樽貼りがうまく納まって傷がつきにくい)

もっとも一部銘柄の樽貼りは残っている。しかし目立つのは小型だ。こう推測してみる。灘からは菰被りの四斗樽で積み込むが、問屋から小売りにわたるまでの段階で二斗樽に小分けする必要があっ

た。そこで問屋サイドが目印になる小さなラベルを貼ったのではないかと。であれば刷ったのは東京だろう。

灘の大手は、国産ガラス瓶の安定供給が始まる1900（明治33）年ごろから、一升瓶への移行を始める。型刷りの菰被りから、印刷ラベルに。革命的なパッケージの変化だったが、デザインはそれまでの菰被りを引き継いだ。

菰被りは、文字が主体で絵柄はほとんどない。意匠に凝ったり色数を増やしたりするのは、技術的に難しかったからだ。絵柄の少なさというのは、その後の灘ラベルを特徴づけてもいる。

1965（昭和40年）ごろのものを見ても、無地の「剣菱」をはじめとして、「白雪」「大関」「桜正宗」「菊正宗」「澤之鶴」などどれもデザインが最小限に抑えられている。具象的なものがあまり描かれず、灘以外の銘柄と比べて、相対的に地味な印象を与える。

灘ラベルの特徴も、菰被りまでさかのぼる歴史を振り返ってみて、初めて納得できる。

おわりに

現在の日本酒の紙ラベルの発祥地は伊勢ではないか。ほんやりとそう思っていて、素材や状況証拠を整理してみた。やはりそうしか考えられない。しかし確実な物証がないだけに、断定もできない。これから当時の写真や画像を、あらゆる方法で探すつもりである。

文献資料も、もっと渉猟したい。これまで灘など酒産地の図書館や資料館、酒蔵の資料館などを当たった。酒造会社の社史も調べ、新聞・雑誌・論文の検索もした。古くからの木版工房や菰樽メーカー、民間の酒票収集家や神田古書街の古い店主、ラベルに触れた本の著者にも聞いた。しかし、これはという情報に出合わない。

それにしても…。刻みたばこや、ビール、輸出茶ラベルなどの歴史やデザインについては、それなりの文献があるのに、なぜ酒ラベルについてはないのだろう。あまりに身近すぎて見逃したか。研究に値しないと思ったか。

太平の世で熟成した江戸時代の日本の文化は、明治以来の「西洋化」で切断された。江戸時代の粋や風趣は、残された浮世絵などでしのぶしかない。

商業デザインも、欧化の波に飲み込まれた。その中でほとんど唯一、江戸以来の伝統の意匠を引き継いだのが酒のラベルだった。収集を始めたのも、無意識にそこに惹かれたのだと思う。

個性を売り物にしたデザイナーというカタカナ職業ではなく、無名の画工が引き継いできた野の意匠。それは日本人の集合的美意識がラベルのデザインに一つの様式美としてあふれ出たものであろう。

しかしそれも、最近のラベルの劣化（意匠を捨てて文字だけ）を見ると、衰弱が始まっている。とすれば、このデザインの系譜にもう少しきちんとした光を当てなければならない。

本稿では、発祥の部分に絞って考察した。ここでは触れていない「なぜ日本酒ラベルは美しい（美しかった）か」は、ネットメディア「酒ストリート」（2021・10・27）に「日本酒ラベル そのデザイン変遷の歴史（前編）—「美しさ」を目指した明治～昭和」として掲載した。

洗練された意匠のラベルがなぜ劣化したか、これから酒が世界で飲まれるようになる時代にふさわしいラベルのあり方は一という点については後編として、2022年3月に掲載を予定している。

参考文献

筆の里工房『酒票の美—文字と意匠』（図録）同館 2021

四日市港湾管理組合編『四日市港開港百年史』同管理組合 2000

- 四日市市編『四日市市史』第17巻 同市 1999
四日市市立博物館編『四日市市立博物館常設展示案内』同館 1994
常滑市史編さん委員会『常滑市史』同市 1976
飯野亮一『居酒屋の誕生』(ちくま学芸文庫) 筑摩書房 2014
四日市印刷工業『EPOCK』同社 2017
白鶴酒造社史編纂室『白鶴二百三十年の歩み』同社 1977
国分『国分三百年史』同社 2015
高部淑子『瀧田家文書にみる伊勢の諸湊』=日本福祉大学知多半島総合研究所『知多半島の歴史と現在21』所収 2017
太田和彦『日本酒のラベルデザイン』=誠文堂新光社『アイデア』379号所収 2017
東広島市教育委員会『東広島市文化財基礎調査報告6 菰樽』同委員会 2009

〈キーワード〉

日本酒, ラベル, 酒票, 四日市, 灘

石田 信夫 (現代文化学部マスコミュニケーション学科)

(2021. 11. 1 受理)

1 『誠忠義臣名々鏡 唐橋全助』



2 『決？ひ玉』



3 『高砂』



4 『菊水』



5 『敷島』



6 『神楽』の版木



7 『雙鶴』



8 『雲龍』



9 『大吉慶』

